

第2回学術研究大会

テーマ 「臨床現場におけるスピリチュアルケアの現状と可能性」

会期 2008年12月7日(日)

会場 京都ノートルダム女子大学

大会長 村田久行(京都ノートルダム女子大学教授)

NPO 法人対人援助・スピリチュアルケア研究会理事長)

学術研究大会に向けて

臨床現場におけるスピリチュアルケアの現状と可能性

第2回学術研究大会のテーマは「臨床現場におけるスピリチュアルケアの現状と可能性」です。平成19年6月、政府によって策定された「がん対策推進基本計画」の重点課題のひとつである「治療の初期段階からの緩和ケアの実施」には、「がん診療に携わる医師の研修等により、がん患者の状況に応じ、身体的な苦痛だけでなく、精神心理的な苦痛に対する心のケア等を含めた全人的な緩和ケアの提供体制を整備するとともに、より質の高い緩和ケアを実施していくため、緩和ケアに関する専門的な知識や技能を有する医師や看護師等の医療従事者を育成していく」必要性が謳われています。そしてそれに応じて医療者を対象としたさまざまな研修会も実施され始めていますが、そこに、私たちNPO法人対人援助・スピリチュアルケア研究会が提唱している〈緩和ケア〉、〈スピリチュアルケア〉の考え方が十分に反映されているとは思えない状況です。

このように具体的に動き出した日本の緩和医療、緩和ケアの現状に対して、あらためて〈緩和ケア〉、〈スピリチュアルケア〉の定義と意義を問い直し、医療・福祉の臨床現場の視点から真に求められている〈緩和ケア〉、〈スピリチュアルケア〉のあり方を会員の皆様と共に探求したいと思います。

大会のプログラムは午前中の自由研究発表3題に続いて、午後には臨床で〈緩和ケア〉、〈スピリチュアルケア〉に携わる医療者の方々をお招きして3時間30分のシンポジウムを開くという構成です。シンポジウムのテーマは、「臨床現場におけるスピリチュアルケアの現状と可能性」です。シンポジウムのはじめはシンポジストの発表と討論を行い、休憩の後、後半はそれまでの発表と討論を踏まえて、フロアの皆様に交えた活発な議論を行いたいと思います。

このシンポジウムを通してこれからの日本の〈緩和ケア〉、〈スピリチュアルケア〉の現状と可能性について、実践に活かせる示唆が得られることを期待したいと思っています。

NPO法人対人援助・スピリチュアルケア研究会
理事長 村田久行

研究発表

「スピリチュアルケアに関するグループワークの有用性」

藤田有紀(洛和会音羽記念病院 緩和ケア病棟)

「臨床(僧侶の)現場におけるスピリチュアルケアの現状と可能性」

高松哲雄(持宝寺僧侶 傾聴ボランティア・徳島傾聴塾代表)

「処置時における緊急入院児の心理的混乱行動の緩和」

今西誠子(京都市立看護短期大学)

座長 佐藤泰子(京都大学大学院 人間・環境学研究科)

シンポジウム

テーマ「臨床現場におけるスピリチュアルケアの現状と可能性」

シンポジスト

的場元弘(国立がんセンター中央病院 緩和医療科)

松原貴子(市立伊勢総合病院 麻酔科・緩和ケアチーム)

尾崎幹子(京都大学附属病院 放射線部・高圧酸素治療部)

原 敬(利根中央病院 外科・緩和ケア診療科)

座長 村田久行(京都ノートルダム女子大学)

的場康徳(鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科)

学術研究大会を終えて

対人援助・スピリチュアルケアの新たな広がり

NPO法人対人援助・スピリチュアルケア研究会の第2回学術研究大会を終えていちばん印象深く思いましたのは、対人援助・スピリチュアルケアの新たな広がりです。また、昨年に比べて大会の参加者数が倍増し、参加者の皆様の熱心な討議と対人援助・スピリチュアルケアへの関心の高さが、今後の可能性を感じさせたことでした。昨年はこのNPOが立ち上げられてまだ1年目の初めての大会でしたので、慣れない運営も熱意だけで乗り切ったところもありました。しかし、今回の第2回大会は個人発表も多彩で、午後も、具体的な事例を素材にしつつ、現場で緩和医療・緩和ケアに取り組む医師と看護師の方々によるシンポジウム「スピリチュアルケアの現状と可能性」をフロアとともに活発に議論し合えて、盛会であったと思います。

これもひとえに、この学術研究大会に関心を寄せ、多くの支援をいただきましたNPO会員、大

会運営事務局、そして意義ある発表と議論をしてくださった参加者の皆様のご協力のおかげと、心より御礼申し上げます。

当日ご記入いただきましたアンケートでは、シンポジウムでの原先生の「緩和ケアチームの専門性は「死の相」から世界を視る終末期患者の見方を共有することにある」という発言に反響が多く、また、高松氏の僧侶によるグリーンケア、尾崎氏の乳がん患者の会の活動を[村田理論]の3次元から分析する発表に対して高い関心が寄せられていました。

一方、本研究会の理念を広く日本の現実の中で問いかけたいという今回のプログラム構成は、研修Aを修了し現場の実践に役立つスピリチュアルケアをさらに深めたいという参加者の方々には少し期待はずれだったかもしれません。しかし昨年の[村田理論]色の濃い第1回大会を超えて、さらに外に開かれた学術研究大会として今回の大会を評価する声も多くありました。

本研究会が目的としている〈対人援助・スピリチュアルケア研究〉は、けっして終末期がん患者のスピリチュアルケアだけを研究の対象としている訳ではありません。今回の大会で、医療・福祉・教育・宗教のさまざまな領域で、あるいは現代日本社会のごく身近な日常でも体験される“生きることの無意味、無価値、虚無・・・”の苦しみにへの援助は必要であり、また確実に広がりを見せはじめていると思います。

今後は、主題が広く浅くなり焦点が拡散する一般のシンポジウム、“お祭り“ではなく、いわゆる[村田理論]の明確な柱に貫かれた、しかも、医療・福祉・教育の広い分野において実践される、質の高い〈対人援助・スピリチュアルケア研究〉の学術研究大会に発展していきたいと思っています。

今後とも、ご支援、ご協力をどうかよろしくお願い申し上げます。

第2回学術研究大会長 村田久行